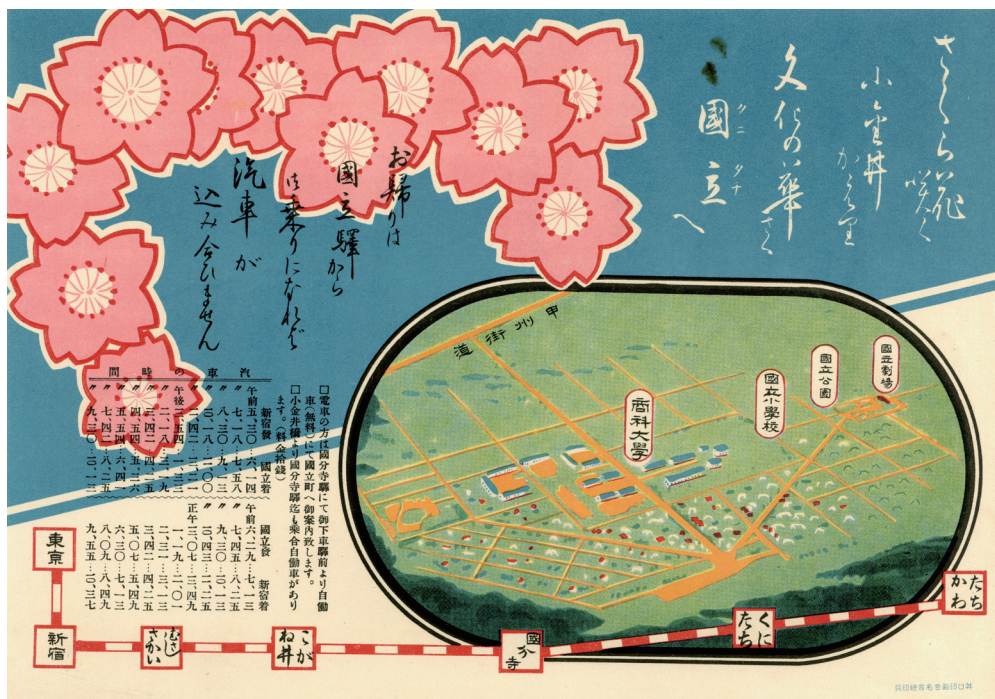


## 館蔵資料紹介：「文化の華咲く国立へ」



資料① 館蔵資料：『国立案内』大正 15 (1926) 年 縦：182 mm×横：260 mm

### はじめに

3月29日、気象庁から東京都の桜の開花が発表されました。当館所蔵の資料から、この時期に相応しい資料を紹介します。

上に掲載した資料①は、大正 15 (1926) 年に分譲地の宣伝用として箱根土地株式会社が作成し、配布したとみられているチラシです。当館の常設展示室でこれと同じチラシを展示してありますが、縦 182 mm、横 260 mmのほぼ B5 サイズの大きさで、片面のみをカラー印刷したものです。右下には「井口印刷合名会社印行」とあり、印刷した会社名を表示しています<sup>1</sup>。

チラシでは、「さくら花咲く小金井かえり 文化の華さく国立へ」と謳っており、東京の桜の名所として名高い小金井に来た花見客を、その帰途、自社が新たに開発した分譲地の見学へと勧誘しています。

この「さくら花咲く小金井」に対比させた「文化の華さく国立」のフレーズ。このフレーズにシビれます。何度読んでも「上手いなあ〜」と感心しきりなのですが、皆さんはどうでしょう？

青と白の上下の区分けや重なり咲く桜花のデザイン、国分寺以西の駅を分譲地の図に合わせるように配している点など、全体的な配置やバランスも気が利いています。「お帰りは国立駅から御乗りになれば汽車が込み合いません」と添えた文句も心憎い感じ

がします。こういった点から、当館所蔵資料の中でも、個人的にお気に入りのひとつです。

### 1. 資料を「読む」

この館蔵資料からはどんなことが読み取れるのでしょうか。次第にマニアックな視点になっていきますが、ちょっと掘り下げてみましょう。

箱根土地株式会社(以下、「箱根土地」とします)は、中央線国分寺駅・立川駅間の沿線にあった広大な雑木林を郊外住宅地へと開発し、「国立大学町」として分譲します。「大学町」のネーミングは、大正 12 (1923) 年 9 月の関東大震災で被災した東京商科大学(現・一橋大学)の郊外移転地であったことに因るものです。東京商科大学の移転にあたって学生の通学の便を図る上で、また新興住宅地の住民の利用を見込んで中央線の新たな駅、「国立駅」が大正 15 (1926) 年 4 月 1 日に開設されます。

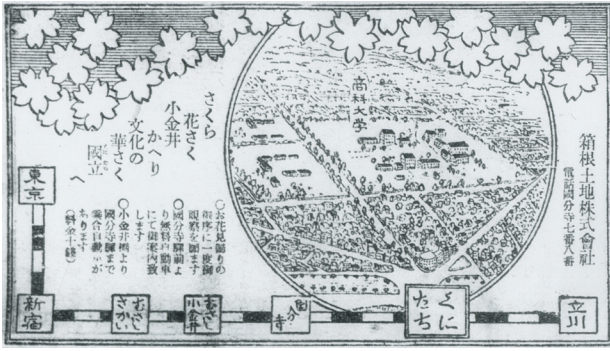
#### 1-a. 作成年代

紹介した館蔵資料は、この国立駅開設直後(あるいはその直前)に作成されたと考えられるチラシです。しかし、資料自体には作成した年月日の記載はありません。ではどこから大正 15 (1926) 年の作成といえるのでしょうか？

ひとつの足がかりとなるものが、箱根土地による

1 大正末期の人名録等の記述から鑑みて、井口印刷合名会社は、井口誠一氏(明治 41・1908 年 早稲田大学商科 卒業)によって大正 13・1924 年に創立された印刷会社で、東京市小石川区(現在の東京都文京区の一部)西江戸川町にあったようです。なお、『日本工業要鑑』第 17 版(工業之日本社、1926 年)に拠ると、大正 15・1926 年当時、30 人の職工を抱えた会社とされています。





資料② 『東京朝日新聞』夕刊 大正 15 (1926) 年 4 月 16 日 1 面掲載 (国立国会図書館所蔵)

新聞広告です。デザインに若干の相違があるものの、館蔵資料と類似した新聞広告が大正 15 (1926) 年 4 月 16 日に掲載されています (資料②) <sup>2</sup>。

資料②の新聞広告と資料①のチラシを比べると、デザイン的にはチラシの方が洗練された印象があります。また、新聞広告の丸窓内に表示されている鳥瞰図が原版に近い描き方であるのに対して、チラシでは簡略化した描写になっています (鳥瞰図に関しては後述)。これらの点からすると、館蔵資料のチラシは、新聞広告よりも後に、新聞広告のデザインをより洗練させて作成した可能性があるのではないかと考えが浮上してきます。観桜客の誘因を狙う季節的な広告ですから、新聞広告と同じ年というよりは、翌年の昭和 2 (1927) 年以降に作成・配布されたチラシなのではないかという見方です。

この点を検討する上で参考になるのが、チラシに掲載された中央線の汽車の発着時刻です。チラシ左下に「汽車の時間」として、新宿駅と国立駅への下り線と上り線の発着時間が記されています。チラシの汽車の発着時間と、国立駅開設直後の時刻表に掲載された発着時間を比較してみると、いずれも一致していることが分かりました <sup>3</sup>。

また、昭和 2 (1927) 年作成とみられる箱根土地のチラシで、多摩御陵参拝客を国立の分譲地視察へ誘ったものに、「御陵参拝汽車時刻表 (三月七日現在)」として中央線の時刻表を記載した資料が存在しています。この多摩御料参拝客向けチラシの時刻表 (資料③) にある新宿駅と国立駅の発着時間は、小金井の観桜客向けチラシの発着時間 (資料①の「汽車の時間」) とは、若干相違しています。

中央線の発着時間からみて、資料①のチラシは、資料②の新聞広告が掲載された時期と同じく、大正

汽車の時間の間											
九	七	五	四	三	二	二	二	八	七	五	三
三	四	五	四	四	一	一	一	三	一	一	一
〇	二	三	三	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	四	五	四	四	三	三	三	三	三	三	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	四	五	四	四	三	三	三	三	三	三	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	四	五	四	四	三	三	三	三	三	三	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	四	五	四	四	三	三	三	三	三	三	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

資料①の「汽車の時間」部分

(在現日七月三)表刻時車汽拜参陵御  
いさ下せ合間御に場車停の寄最らかすまりあが更變々時

		午後						午前										
		▲X◎						◎▲▲										
九	七	六	五	四	三	二	一	〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	四	五	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	四	五	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	四	五	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

すまし 轉運日毎中の分當は印▲  
すまし 轉運日限に日祭曜日中月三は印X  
すまし 轉運日限に場合の數多者拜参他其日祭曜日は印◎

資料③ 多摩御料参拝客向けチラシ掲載の時刻表

15 (1926) 年 4 月の桜の花見シーズンに作成・配布されたものと捉えて良さそうです。

### 1-b. 鳥瞰図

資料①のチラシにある楕円形の窓の中と、資料②の新聞広告の丸窓の中には、国立大学町の鳥瞰図が描かれています。いずれも同じ方向から眺めた体裁の鳥瞰図ですが、新聞広告の描写と比較すると、チ

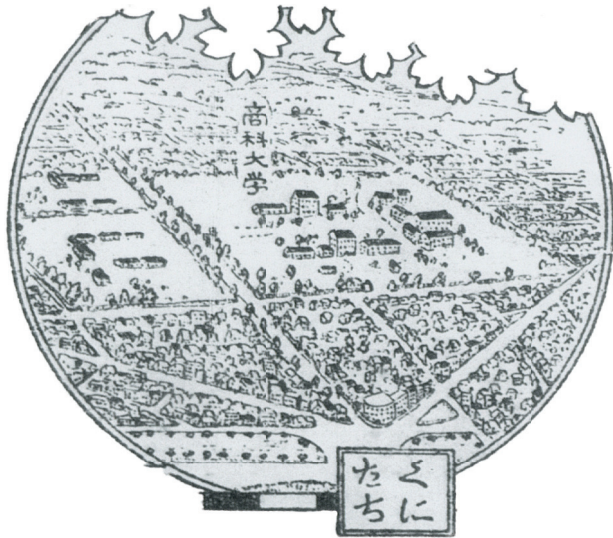
<sup>2</sup> 資料②と同日の『都新聞』(朝刊・3面)や翌日の『読売新聞』(朝刊・3面)にも、同じ広告の掲載を確認できます。

<sup>3</sup> 鉄道博物館所蔵の鉄道省運輸局編纂『汽車時間表』大正 15・1926 年 4 月号に記載されている発着時間との比較によります。





資料①の鳥瞰図部分

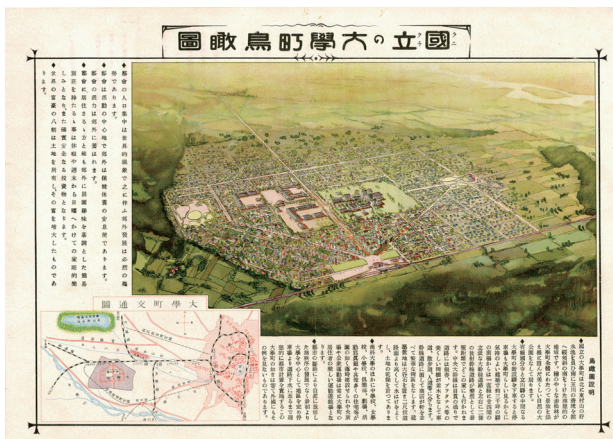


資料②の鳥瞰図部分

ラシのそれは簡略化されているのが分かります。

これらの鳥瞰図には、元となる図が存在しており、箱根土地が大正 14 (1925) 年 10 月前後に作成したとみられる『国立の大学町鳥瞰図』がそれです(資料④)。

これは東京商科大学の関係者や得意先に配布する分譲地の案内として作成されたもので、鳥瞰図裏側には宛名面が印刷されており、折りたたむと郵送す

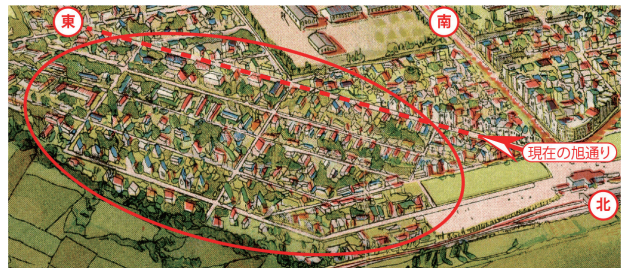


資料④『国立の大学町鳥瞰図』大正 14 (1925) 年頃

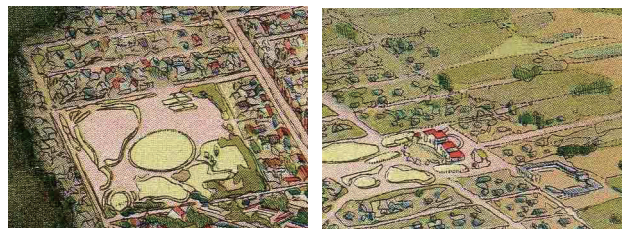
ることができるように仕立ててあります<sup>4</sup>。

資料④の『国立の大学町鳥瞰図』に描かれた大学町は初期のプランとみられ、実際に開発・造成されたものとは異なる部分を確認できます。そのひとつとして、旭通り北東側の街区パターンが現状と異なる点が指摘されています。描写が簡略化されているものの、資料①の鳥瞰図にある旭通り北東側の街区パターンは、資料④で描かれたものと同様になっています。

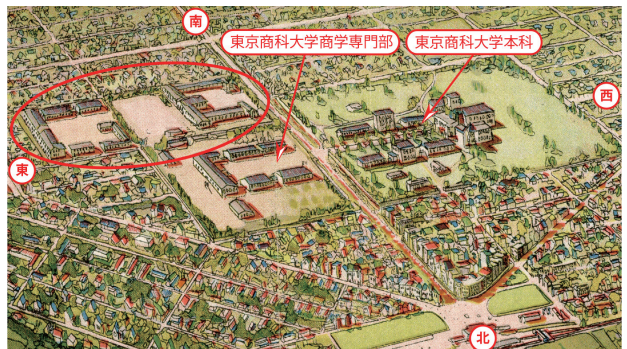
また資料④の鳥瞰図には大学町の東西に公園や遊園地のような施設を描いており、劇場、活動写真館、中央広場、公衆運動場といった施設を表現していた可能性が考えられます。この施設と同趣の描写が、資料①にも認められます。資料①では西側の施設について、手前の広場部分を「国立公園」、その奥西側の建物を「国立劇場」と記しています。資料④の鳥瞰図には直接記されていない情報であり、資料①にある記載は、大学町の初期プランを確認する上で有益な情報となるものです。



資料④の旭通り北東側に描かれた街区パターン



資料④の大学町東側(左)と西側(右)に描かれた施設



資料④の東京商科大学商学専門部の南側に隣接した施設

4 「国立の大学町鳥瞰図」について当館 HP で資料紹介をしています。鳥瞰図に描かれたまちづくりの初期プランについても検討していますので、こちらの資料紹介も併せてご覧ください。

当館 HP「机上のメモから」『国立の大学町鳥瞰図』から大学町の初期プランをみる」:

<https://kuzaidan.or.jp/province/curator-info/20200521-7/>



資料④の鳥瞰図では東京商科大学の商学専門部南側に隣接した施設が描かれています。同校の大学新聞『一橋新聞』の記述<sup>5</sup>からみて、この隣接した施設は小学校や中学校等の建設を予定しての描写だったようです。しかしながら資料①では大学の西側、現在の国立学園小学校所在地の辺りに「国立小学校」の表示があります。

国立学園小学校は、大正15(1926)年3月31日に設置認可が下りていますが<sup>6</sup>、現在の所在地に本校舎が完成し、仮校舎から移転したのは同年10月1日のことでした。しかしながら、当時の新聞報道等に拠ると、移転前の同年5月には既に起工式や地鎮祭が挙行されていることが分かります<sup>7</sup>。資料①の作成時(同年4月かその直前)には、同校の設置場所も定まっていたことから、「文化の華さく国立」に相応しい施設のひとつとして「国立小学校」の表記を加えたと考えられます。

## 2. 資料から「広げる」

資料①のチラシは、前記のとおり、大正15(1926)年4月の桜の花見シーズンに作成・配布されたと考えられるものです。国立駅発着の汽車の時間を掲載し、「お帰りは国立駅から御乗りになれば汽車が込み合いません」と宣伝していることから、国立駅が開業した4月1日以降に配布されたとみてよいでしょう。資料②の新聞広告が4月中旬に掲載されていることを加味すれば、資料①のチラシもその頃に配布された可能性も十分あります。

ここでちょっとした疑問が湧いてくるのです。観桜時期の花見客を対象とした宣伝を、4月中旬に展開したのでは広報活動としてちょっと遅くはないかと。この点をちょっと掘り下げてみましょう。

### 2-a. チラシ配布時の桜の花見時期

気象庁では、ソメイヨシノを主とした近年の開花

日と満開日をインターネット上で公開しています<sup>8</sup>。そのデータから東京における直近の開花日と満開日を確認すると、

2021年：【開花日】3月14日【満開日】3月22日

2022年：【開花日】3月20日【満開日】3月27日

2023年：【開花日】3月14日【満開日】3月22日

となっています(標本木はソメイヨシノ)。

過去の平年値では、「開花日」が3月24日、「満開日」が3月31日となっており、最近の東京におけるソメイヨシノの開花状況では、4月前には満開となっていることが分かります。

では、チラシが配布された大正期の桜の開花時期は、現在と変わりなかったのでしょうか?

大正期の桜の開花時期を知るための情報は限定的ですが、幕末から大正期にかけての個人の日記から、その記録を発掘した論考が発表されています<sup>9</sup>。

同論考では、明治6(1873)年から大正13(1924)年間の記録から、「開花の最早日・平均日・最遅日」を3月21日・4月3日・4月10日とし、「満開の最早日・平均日・最遅日」を3月31日・4月9日・4月17日として抽出しています。そして「現在の東京におけるソメイヨシノの開花と満開の平均日(1991~2020年の平均;3月24日と3月31日;気象庁、2022a)と比べて、それぞれ10日程度遅かった」と報告しています<sup>10</sup>。地球温暖化に伴う気候変動によって、桜の開花する季節が変化し、その時期は早まってきている傾向にあるようです。

資料①のチラシが配布された大正15(1926)年当時の東京中心部と近郊の桜の開花報告<sup>11</sup>に拠ると、多摩川沿い稲田堤の実地踏査では、4月11日で8分咲き程度であったことが示されています。この報告には、小金井の開花状況が記録されていませんが、都心部やその近郊・遠郊における推定の満開

5 「東京西郊谷保村に本学移転敷地決定す」『一橋新聞』第27号(大正14・1925年11月15日)2面

6 渡辺彰子『国立に誕生した大学町一箱根土地(株)中島陟資料集一』(株式会社サトウ、2015年)の136頁以降に掲載されている国立学園小学校の設置認可願では、その「位置」を「北多摩郡谷保村谷保字拜島道北九一二三番」と記しており、申請(大正15・1926年3月10日)の段階で現在の所在地とほぼ同じ場所へ設置することが予定されていたことが分かります。

7 『東京日日新聞』府下版(大正15・1926年5月8日)8面「国立小学校 六月中旬落成」では、「国立小学校は岡本組の手で六日起工式を挙行了した」と報じています。また、『読売新聞』朝刊(大正15・1926年5月21日)3面などに掲載の国立大学町土地分譲の広告では、5月23日に「国立学園地鎮祭挙行」との告知がなされています。

8 国土交通省 気象庁 HP の「各種データ・資料」において、「さくらに関する情報」として昭和28・1953年以降のデータが公開されています(<https://www.data.jma.go.jp/sakura/data/index.html>)。

9 永井信・小谷亜由美・丸谷靖幸「跡見花蹊日記を用いた明治・大正期における東京のサクラの開花季節記録のマイニング」『日本生気象学会雑誌』第59巻3・4号(日本生気象学会、2022年)

10 抽出された開花日や満開日の記録については、日記という資料の制約から、「観察場所や観察者の違い・不連続な観察日・サクラの種や個体差に起因した系統的な誤差を少なくとも数日程度含むと考えられる」(97頁)と述べています。

11 渡邊正之・菊池常武・金川治三郎「大正十五年東京市及び其の附近に於ける桜の開花状態に就て」『気象集誌』第2輯第6巻第5号(大日本気象学会、1928年)



日を、概ね4月9日～15日として提示しています。

当時の新聞報道からも確認してみましょう。小金井の桜の開花情報であれば、現在の「多摩版」に掲載されている可能性が高いと考えました。そこで国立国会図書館が所蔵する『東京日日新聞』（現在の毎日新聞）の「府下版」を確認したところ、幸いにも幾つかの記事が検出できました。

大正15（1926）年4月9日付の記事<sup>12</sup>では、稲田堤の桜の見頃を「十一日の日曜から十八日の日曜へかけてとであらう」とした上で、「花の遅い小金井の見頃はそれを受けて十五、六日からでもあらうか」と報じています。

同13日付の記事<sup>13</sup>では、「小金井の桜も見事にさき初め十一日の日曜は恰も人待ち顔に花はさき老若男女の別なくこゝに集まるものは著しく電車から雪崩を打つてはみ出され」と開花の状況と訪れる花見客の様子を報じ、11日の小金井を収めた写真も掲載しています（資料⑤）。

同16日付の記事<sup>14</sup>では、「小金井の花も漸く見頃」として、「小金井は十五日から十八九日が人も花もま盛りであらう」と報じています。

なお、『小金井市史』資料編には、当時の『東京



資料⑤ 『東京日日新聞』府下版 大正15（1926）年4月13日 6面掲載（国立国会図書館所蔵）

朝日新聞』の記事が掲載されており<sup>15</sup>、4月17日付夕刊の記事<sup>16</sup>では、「小金井が八分さきであるから、この十八日の日曜にはこの方面に向つて花見の客が雪崩れこむであらう」とし、「東京鉄道局管内では四月の第三日曜が一年中でも最大レコードを造るのが例になつてゐる」と述べています。

これらの新聞報道から鑑みて、大正15（1926）年当時の小金井の桜の花見時期は、4月中・下旬に最盛期を迎えていたと考えて大過ないようです<sup>17</sup>。

現在の東京におけるソメイヨシノの開花時期を踏まえると、花見客対象のチラシを4月に入ってから配布するのは遅いと感じるのですが、当時の開花時期からすれば、まだまだこれからが花盛りといった時に配布していたことが分かります。

余談ですが、先の『東京朝日新聞』の記事では、4月18日の日曜日に観桜客の集中を予想し、「今年の第三日曜には乗客数百四十三四万に達し震災後の新レコードを造るだらうと予想されてゐる」と述べていました。

しかし、実際は予想どおりにはいかなかったようで、『小金井市史』資料編掲載の同紙4月20日付夕刊の記事<sup>18</sup>に拠ると、この大事な第3日曜日の4月18日は雨模様の天気となったようです。雨のために実際の人出は予想よりもかなり少なかったらしく、「小金井、武蔵境、国分寺方面では今までに三万八千余人のお客があつたがこれも昨年に比べて四千六百余人少なく」と報じています。

天気の影響で予想よりは少なかったにしろ、それでもこの時期の小金井には多くの観桜客が訪れています。同19日付夕刊の『読売新聞』の記事<sup>19</sup>では、小金井へと向かう観桜客の数が多いたことが記されており、同20日付の『東京朝日新聞』<sup>20</sup>には、花見客で賑わう小金井の写真が掲載されています（資料⑥）。

12 「桜、早やぎき 稲田堤の賑ひ きのふ朝からぞろぞろ」『東京日日新聞』府下版 大正15・1926年4月9日（金）6面

13 「小金井の桜」『東京日日新聞』府下版 大正15・1926年4月13日（火）6面

14 「きのふの小金井 花始まつての珍らしい人手」『東京日日新聞』府下版 大正15・1926年4月16日（金）8面 なお、翌17日（土）の同紙12面には、「花郷の種々相」と題した記事と「高尾橋」「小金井」の写真が掲載されています。

15 『小金井市史』資料編 小金井桜（小金井市、2009年）610・611頁

16 「この日曜日がとうげの花見 いま八分さき的小金井へ 集中されてゐる人気」『東京朝日新聞』夕刊 大正15・1926年4月17日（土）2面

17 明治39・1906年の刊行ながら、『風俗画報』第337号 小金井名所図会（東陽堂支店、1906年）でも、小金井の観桜時期について、「四月十日後より綻び初め。二十日前後を爛漫の期とす」（4頁）と述べています。

18 「ぬか喜びの花見の算用 見事に外れた書入れの第三日曜日！どこも泣面」『東京朝日新聞』夕刊 大正15・1926年4月20日（火）2面

19 「名残の花に乱舞する人々 小金井、荒川堤に繰り出した人、人、人」『読売新聞』夕刊 大正15・1926年4月19日（月）6面 では、「新宿駅では小金井まで十二哩を間断なく電車を運転して詰まるだけ詰め込む」、「この調子では無警察の小金井は人で埋まつてしまふだらう」と述べています。

20 「写真 昨日の小金井」『東京朝日新聞』朝刊 大正15・1926年4月20日（火）7面





資料⑥ 『東京朝日新聞』朝刊 大正 15 (1926) 年 4 月 20 日 7 面掲載 (国立国会図書館所蔵)

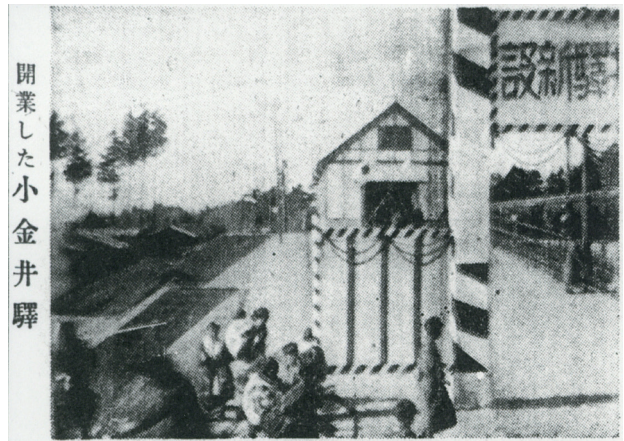
## 2-b. 武蔵小金井駅の開設

資料①のチラシを確認すると、中央線の駅名が幾つか記されています。その中の「こがね井」とは、武蔵小金井駅のことで(資料②の新聞広告では「むさし小金井」と省略せず表示しています)。

武蔵小金井駅は、大正 15 (1926) 年 1 月 15 日に開業しました (資料⑦<sup>21)</sup>)。同年 4 月 1 日に開業した国立駅からみると、中央線において「すぐ上の先輩、にあたる駅、それが武蔵小金井駅になります。

現在の中央線の前身となった甲武鉄道は、明治 22 (1889) 年 4 月 11 日に新宿・立川間で開業しました。この 4 月の開業時期は、桜の名所として名高い小金井への花見客の乗車を見込んでといわれています。

武蔵小金井駅開設以前、小金井へ観桜に訪れる人びとは境駅 (大正 8・1919 年、武蔵境駅に改称) や国分寺駅を利用しました。甲武鉄道開業の翌年、



資料⑦ 『東京日日新聞』府下版 大正 15 (1926) 年 1 月 16 日 10 面掲載 (国立国会図書館所蔵)

両駅前の「茶屋中」が、「小金井に遊び給ふ御客様方に栞」として配布した『小金井観桜御案内』<sup>22</sup>には、両駅からの観桜ルートを描いています。ちょっと長くなりますが、当時の茶屋による売り口上をのぞいてみましょう。

花を茲<sup>ここ</sup>に観んと思う方々は、四月の初旬<sup>はじめ</sup>より末迄の内、御都合よき日を撰み、先つ朝食<sup>あさげ</sup>立ちして、新宿また上野・新橋より汽車に乗り、境停車場にて下り給はば、是より五・六丁にして花のある処に出れば、ここ迄腕車<sup>じんりき</sup>を倩<sup>やと</sup>うも、膝栗毛と出懸<sup>ひざくりげ</sup>け給うも御勝手なり。愈<sup>いよいよ</sup>花の下に至れば、掛茶屋杯もあれば、憩<sup>いこ</sup>うて飲食<sup>のめい</sup>をするも御自由なり。また足の向うまにまに彼地此地徘徊<sup>あちこちあそびおわ</sup>終れば喜平橋に至り、左に折れて十二・三町往けば、国分寺停車場に出れば、帰途<sup>かえり</sup>は是に依らるる方妙なり。殊に国分寺郷には古聖武天皇の建立せられし大伽藍<sup>だいがらん</sup>の古跡<sup>あと</sup>あれば、之を訪<sup>たず</sup>ねて当時<sup>そのとき</sup>の有様<sup>ありさま</sup>を追懐<sup>おもいだす</sup>するまた御一興なり。又前に国分寺停車場にて下車<sup>おり</sup>し喜平橋に出て、花を見ながら境停車場より乗りて帰途<sup>きと</sup>に就かるるも可ならん<sup>23</sup>。

境駅と国分寺駅は、いずれも甲武鉄道が開通した時に設けられた駅です。ただ、同鉄道の路線が確定した時点では、国分寺ではなく、小金井に駅を設置する方針であったようです。その情報を得た国分寺村内では駅誘致へと動き出し、駅予定用地の寄付といった働きかけが功を奏して、国分寺に駅が設置されることになったと伝えられています<sup>24</sup>。

21 『武蔵小金井駅』喜びの声につつまれて 昨日から開業』『東京日日新聞』府下版 大正 15・1926 年 1 月 16 日 (土) 10 面

22 『国分寺市史』下巻 (国分寺市、1991 年) 527 頁 なお、『小金井市史』資料編 小金井桜 (小金井市、2009 年) には、「二〇六小金井観桜御案内」として翻刻が掲載されています。

23 読みやすさを考慮し、句読点を補い、仮名遣いを改めるなど、引用者が原文に変更を加えています。

24 『国分寺市史』下巻 (国分寺市、1991 年) 523～525 頁。なお、『小金井市史』資料編 近代 (小金井市、2014 年) 「148 甲武鉄道停車場設置の請願 [明治二十一年 (一八八八)]」にも、「停車場之儀ハ小金井村へ設置之事存居候処、同所ニテハ不便之趣



甲武鉄道開通時には駅が開設されなかった小金井村ですが、明治 43 (1910) 年には観桜期の臨時停車場開設の願書が提出されます。その後、大正 11 (1922) 年になると、常設の停車場を請願する誘致運動が全村を挙げて行われ、再三にわたって駅開設の願書が提出されています。大正 12 (1923) 年 6 月には、北多摩郡長から小金井村内への駅設置が通達されますが、同年 9 月の関東大震災発生の影響により開設計画は遅延します。その後も小金井村による度重なる陳情を経て、観桜時期の季節的な臨時設備ながら、大正 13 (1924) 年 4 月に仮停車場 (資料⑧) がようやく設けられることとなります<sup>25</sup>。

この武蔵小金井の仮停車場新設やその後の経過等については、管見の限りですが、幾つかの新聞記事が確認できました。それらを別添資料としてまとめ、報道内容に拠って開設当時の状況を確認してみましょう。

新設された仮停車場は、4 月 11 日から同月末日までの臨時開設であったようです。

「存続期間は四月十一日より四月末日まで」：記事②<sup>26</sup>

「四月中毎電車とも停車することになった」：記事④

「十一日から四月三十日迄の間臨時に小金井駅を新設」：記事⑤

「四月中旬から五月中旬まで」(記事①) と 5 月までの開設を報じた記事もありますが、当時の観桜期間を考慮すれば、4 月いっぱいの臨時開設だったと考えるのが順当でしょう<sup>27</sup>。

開業日の 11 日には午後 1 時から開駅の祝賀会が催されています。

「開場式を十一日午後一時同所で行はれる事となつた」：記事②

「同日〔11 日：引用者〕午後一時から同所に付近有志は新設祝賀会を催す」：記事③

「今〔11 日：引用者〕午後一時から小金井村では、鉄道関係者等を招いて開駅祝賀会を催した」：記事④

「今日〔11 日：引用者〕午後一時開場式をあげ」：記事⑤

記事②では「今まで小金井に遊ぶ花見客は二里以



資料⑧ 『東京日日新聞』府下版 大正 13 (1924) 年 4 月 15 日 6 面掲載 (国立国会図書館所蔵)

上の道を歩かねばならぬので、『もう少し交通の便がよかつたなら』とかこつ声を聞いたが、武蔵境と国分寺の中央に設けられたこの停車場によつてその声もきかなくなるであらう」と述べています。仮停車場開設のメリットについては、各記事が桜まで歩いて向かう花見客の移動負担の軽減を述べています。

「小金井へ観桜のお客さんは皆国分寺か武蔵境で汽車を降り、遠い道をテクテク歩かなければならぬので (中略) 臨時小金井駅を新設し汽車電車を停めて観桜客の便宜を計る事にした」：記事①

「同駅は桜の名所小金井のすぐ前で、従来は約一里も歩いたのを僅か三町程で花のトンネルへ行ける」：記事④

「駅からはわづか六町ばかりでどんな足弱な女子供にでも一日の行楽が出来る」：記事⑥

「小金井に最も近い所でもある」記事⑦<sup>28</sup>。

さらに、記事⑦では「境駅と国分寺駅との間は相当に距離があるので、こゝに一駅設けたら一層混雑を防ぐことが出来るといふので予て地元民の請願により花見時だけの仮駅を設けることになり」と混雑緩和についても紹介しています。観桜時期の武蔵境駅と国分寺駅の混雑は相当なものだったようで、明治 43 (1910) 年に小金井村が仮停車場の設置を願った際には、「其雑踏殆ど予想ノ及バザル所ニシテ、是レガ為メ駅ノ建造物ヲ破毀シ、負傷者ヲ生ズル等ノ事ハ、毎年事実ノ証明スル所ニ有之候」<sup>29</sup> と述べています。表現に誇張があるのかもしれませんが

ヲ以廢設ト相成候」とあります。

25 『小金井市史』通史編 (小金井市、2019 年) 500・501 頁。なお、同市史 資料編 近代 (小金井市、2014 年)「305 小金井停車場設置請願書 大正十一年 (一九二二) 一月」には、「最近ニ至リ花期臨時仮停車場設置ノ義ヲ請願スルコト二回ニ及ビ」とあって、大正 11・1922 年の常設停車場の請願開始前における誘致運動について述べています。

26 記事①～記事⑦は別添資料に付した番号です。掲載紙や掲載日等については別添資料に記載しています。

27 『小金井市誌 I』地理編 (小金井市、1968 年) の記載では、4 月 20 日の日曜日、仮停車場で「降車客 26,555 人、乗車客 29,319 人」という記録を作った」(160 頁) ことが示されており、活況を呈していたことが知られます。

28 武蔵境駅・国分寺駅から小金井の花見スポットまでの距離は各記事で相違しています。因みに、「小金井名所図会」と題した明治 39・1906 年の『風俗画報』第 337 号 (前掲註 17 でも紹介) では、「境停車場より小金井まで十丁と称すれど、左久良橋まで五六町に過ぎず」、「是〔国分寺停車場：引用者〕より小金井橋まで十五町あり」(いずれも 28 頁) と紹介しています。

29 『小金井市史』資料編 近代 (小金井市、2014 年)「259 小金井村に仮停車場設置願 明治四十三 (一九一〇) 四月」



が、「毎年事実ノ証明スル所」だと言っていますから、実際に駅施設の破損や負傷者が生ずる程の混雑があったのでしょうか。記事⑦でも「小金井の花見には境駅と国分寺駅が最も混雑する しかしてこのうち境駅は最もこむ時など押しつぶされさうにもなる位なので、駅内も相当に改善を加へ東京鉄道局から四十名の応援隊が来ることになり」と報じており、観桜時期の両駅の混雑ぶりがうかがわれます。

移動距離の軽減や駅の混雑緩和といった、小金井を訪れる観桜客の便宜を図るために設けられた仮停車場でしたが、翌年の大正 14 (1925) 年も観桜時期の季節的な臨時施設として設けられています。

記事①では「鉄道省では来年度〔大正 13・1924 年度：引用者〕に五十万円の予算で旅客専門の小金井駅を新設し出来上り次第普通停車場同様電車汽車のお客さんを取扱ふ事に決定した」と報じていましたが、大正 14 (1925) 年の観桜時期にはまだ常設の駅とはなりませんでした。

記事①では鉄道省の予算で常設の駅を設置する旨を述べていますが、大正 14 (1925) 年の仮停車場設置では、鉄道省側の資金投下があったようです。

「小金井の仮乗降場は今年は鉄道側が金を出して新設することになり」：記事⑨

「小金井駅は是まで花見頃になると同村民の手で仮ホームが作られたが今年は鉄道省側で仮ホームを設ける」：記事⑩

2 年目となった仮停車場設置については、確認できた情報が少なく、その開設期間すら詳らかではありません。記事⑪で 4 月 9 日からの開場を、記事⑫⑬では 4 月 10 日からの設置を報じていますが、いずれが正しいのか決めかねます。前年の開設日(4 月 11 日)は、週末に観桜客が殺到する前の金曜日でした。記事⑫⑬が示す 10 日が金曜日であることから、個人的にはこちらに軍配を挙げたい気持ちではあります。

前年同様、仮停車場設置の祝賀会が催されたようですが、いつ開催されたのかを示す情報は、現段階

では未見です<sup>30</sup>。

記事⑭で「小金井仮乗降場は小金井行の客の乗降を待ち受けて居る」と述べており、4 月 18 日(記事⑭は 19 日付夕刊)までは設置されていたことが確認できます<sup>31</sup>が、いつまで開設されていたかを示す情報が発見できていません。前年同様、4 月末日までの開設であった可能性はありますが、詳細を知るには新たな情報の出現を待つしかない状況です。

大正 14 (1925) 年の観桜時期を過ぎた 6 月 18 日、小金井村から「小金井新駅速成ノ件」について改めて陳情がなされています<sup>32</sup>。この陳情を受けて 6 月 26 日付で東京鉄道局より、新駅設置が「本年度ニ於テ施行著手ノ見込」である旨が通知されます<sup>33</sup>。

新駅設置の工事は、この通知どおり年度内に施工されたようで、大正 14 (1925) 年 12 月 12 日付の記事⑮では、新駅設置工事の完成を伝えています。この記事では、新設された駅舎を取り上げ、「屋根は葡萄色のスレート葺、建物の腰は地上三尺まで人造石の洗出し」の「文化様式建築」で、「武蔵野の空の色の周囲の花の眺めにしつくり一致した気持ちよい建物」とであると報じています。前掲写真(資料⑦)に収められている駅舎がそれで、「本屋(待合室)へも卅六坪俄雨の時は千人近くの人収容出来る外平素は表口だけ使ふのだが花時は裏口も開ける様に仕組み」とも伝えています。

大正 15 (1926) 年に武蔵小金井駅が開設された当時の駅舎は、その後長きに亘って同駅南口で駅舎として使用されていました。平成 21 (2009) 年に完成した中央線の高架化工事に伴い解体され、残念ながら現存していません。

この駅舎については、昭和 30・40 年代に外観が撮影された写真を数枚確認した程度で、駅舎内部を収めたものは経眼していません。写真による外観の判断ですが、昭和 30 (1955) 年頃の駅舎はまだ建設当時の面影がよく残っているように感じます(資料⑨<sup>34</sup>)。昭和 41 (1966) 年の写真<sup>35</sup>では、駅舎正

30 前掲註 29 と同書の「321 停車場新設期成会解散通知 大正十五(一九二六)一月」で、「仮駅設置祝賀」について 2 回分の費用が計上されており、大正 13・1924 年に続いて、大正 14・1925 年にも何かしら祝賀の会が催されたとみられます。

31 『省線電車史綱要』(東京鉄道局電車掛、1927 年)「XIII-2-1 表 掲示、ポスター逐年種別表」に拠れば、大正 14・1925 年 4 月 19 日の午前 7 時から午後 7 時まで、東京・国分寺間を直通運転とする観桜電車が 12 分毎に運転されています。記事⑭でもこの観桜電車を報じていますが、武蔵小金井の仮停車場にも停車させたのかどうか気になるところです。

32 前掲註 29 と同書の「314 小金井新駅速成の件陳情 大正十四年(一九二五)六月」

33 前掲註 29 と同書の「315 新駅設置本年度着手見込み通知 大正十四年(一九二五)六月」

34 資料⑨は、三好三編『中央線 街と駅の 120 年』(JTB パブリッシング、2009 年) 127 頁に「武蔵小金井駅南口」として掲載されています。その解説でも「この当時は駅の施設もほぼ原型を保っていた」と記しています。

35 山田亮『JR 中央線・青梅線・五日市線 各駅停車』(洋泉社、2016 年) 103 頁掲載の「昭和 41 年」写真



面の壁面が撤去され、待合室がコンコース化したであろう様子がうかがえます。小金井のベッドタウン化によって昭和 37（1962）年より駅の利用者が急増し、昭和 39（1964）年には乗降客数が 11 万人を超え、昭和 33（1958）年に比べ 253%もの増加を示したとされています<sup>36</sup>。

増加した乗降客の動線確保のため、駅舎正面の壁面を撤去するという改修は、国立駅でも昭和 35（1960）年から同 36（1961）年の間に実施されており<sup>37</sup>、武蔵小金井駅でも似たような処置が施された可能性がありそうです。

武蔵小金井駅開設当時の駅舎については、大正 11（1922）年 7 月 15 日に開業した高円寺・阿佐ヶ谷・西荻窪各駅の駅舎との類似性が指摘されています<sup>38</sup>。当時「文化様式建築」と報じられた駅舎がどのようなものであったのか大変興味がありますが、まだまだ調査不足でその詳細を把握するまでには至っていません。

### 3. 資料から「離れる」：派生事項への展開

繰り返しになりますが、武蔵小金井駅は、国立駅の約 3 ヶ月前に開業した中央線で直近の先輩格となる駅です。当駅を調査することで、国立駅開業において不足している情報が補強されるのではないかと感じています。しかも羨ましくも有難いことには、小金井市には武蔵小金井駅開設までの請願等に関する資料が数多く遺されており、『小金井市史』資料編には、多くの資料が翻刻・掲載されています<sup>39</sup>

#### 3-a. 駅誘致運動の期間

大正 15（1926）年に武蔵小金井駅が開業されるまでには、地元による停車場設置の運動が明治 43（1910）年には既に開始されています。また、大正 11（1922）年には全村を挙げての誘致運動も展開されます。「大正十一年一月の新駅設置の請願書提出以来、丸四年間の全村を挙げた活動により」<sup>40</sup>、武



資料⑨ 武蔵小金井駅南口 昭和 30（1955）年前後  
(小金井市教育委員会所蔵)



現在の武蔵小金井駅南口 令和 6（2024）年 3 月撮影

蔵小金井駅は開業を迎えています。

これに対して国立駅の場合は、大正 14（1925）年 4 月 7 日に停車場設置請願が箱根土地から行われ、同年の 10 月 30 日には設置が許可されます<sup>41</sup>。

神田一ツ橋の地から国立（当時の谷保村）への移転を計画していた東京商科大学では、同校の佐野学長から、同年 4 月 15 日に鉄道省へ停車場新設の請願を行っています<sup>42</sup>。この請願では、「建築材料ノ運搬学生生徒ノ通学其他ノ便宜御賢察ノ上右請願至急御詮議相成候様御配慮相煩シ度」と述べており、東

36 関野寿幸編『市報で見る昭和の小金井写真展』（小金井史談会、2018 年）「8：武蔵小金井駅の混雑」

37 国立駅における駅舎の壁面撤去については、当館 HP 掲載の写真紹介 -17『国立駅備付 善意の傘』（1959・昭和 34 年頃）と国立駅・矢川駅・谷保駅において、「2-1 c. 駅舎南面の壁面撤去」として検討・紹介しています。

当館 HP「くにたち あの日、あの頃」写真紹介 -17：<https://kuzaidan.or.jp/province/kuni-photo/photo-info/photo17-umbrella/>

38 当館図録『「赤い三角屋根」誕生』付録「中央線駅舎案内-国立駅開業当時を中心の一」

39 『小金井市史』資料編等に掲載の資料については、永江雅和『中央沿線の近現代史』（クロスカルチャー出版、2020 年）第 9 章「小金井桜と「はげ」の街」を参考にしました。

40 『小金井市史』通史編（小金井市、2019 年）501 頁。

41 「国立駅設置経過」この資料は、渡辺彰子『国立に誕生した大学町一箱根土地（株）中島陟資料集一』（株式会社サトウ、2015 年）126 頁に掲載されています。

42 依光良馨『大学昇格と籠城事件』（如水会、1989 年）273・274 頁。なお同請願で、「大正壹拾四年四月七日付ヲ以テ箱根土地株式会社ヨリ中央線国分寺、立川両駅ノ中間ニ停車場新設ノ件ニ就キ請願書提出致候」と述べており、箱根土地による停車場設置請願の日付をここでも確認できます。



京商科大学の移転に伴う停車場新設を至急詮議してくれるように求めています。

東京商科大学の移転という大きな要因が存在していたにしろ、設置請願からその許可まで半年程度で決まったというのは、当時としても急展開の決定だったようです。国立駅の新設に関し、「数百の停車場設置の請願が十数年前から出てゐる」という状況にあって、その即決ぶりは「全く未曾有のことである」と報じられた<sup>43</sup>のは、異例のスピードで新設が決定したからでしょう。なお、東京商科大学の『一橋新聞』では、設置許可前の7月1日付の記事<sup>44</sup>で、「今度移転する新敷地は中央線の国分寺と立川との間になるので、鉄道省と協議の結果新駅を設置することになった」と報じ、学生達に新駅の名称募集までしています。学内では、新駅設置の情報がさらに早い段階で広まっていたことが分かります。

前年の大正13(1924)年の新聞報道には、「運動次第で按排する停車場の新設」と題した記事も確認できます<sup>45</sup>。この記事では、「鉄道省の停車場設置及び移転等は該地方に対して多大の影響を及ぼすので新線開通等の際は停車場の設置場所につき猛烈なる運動が開始される」と述べ、各政党・代議士による運動への介入を指摘しており、鉄道省との関係性の強弱により対応に差が生ずることを匂わせた書きぶりとなっています。鉄道省に対する停車場設置の出席願数が130以上に達している中で、大正9(1920)年から同13(1924)年にまでに決定したのは19ヶ所に過ぎず、決定した停車場の発表を鉄道省が避けているのは、「運動次第で按排をしてゐる関係上秘密をまもつてゐる様である」とも報じています。

国立駅開設においてどのような運動がなされたのかは、資料の制約もあって詳らかではありません。対して武蔵小金井駅設置までの誘致運動に関する資料は、『小金井市史』に数多く掲載されています。停車場新設請願の主体が、一方は地元民(武蔵小金

井駅)、一方は分譲地を開発したデベロッパー(国立駅)であるという相違はありますが、国立駅開設における調査において、武蔵小金井駅誘致運動の資料は参考となりそうです。

### 3-b. 駅名決定

関東大震災発生前の大正12(1923)年6月、小金井村内への駅開設について、北多摩郡から同村へと通達がなされます<sup>46</sup>。この情報をキャッチしたのであろう報道が、同年6月22日付の『東京日日新聞』府下版掲載の記事です<sup>47</sup>。そこでは「駅名はやはり桜小金井とでも命名される筈」と報じていましたが、震災発生による遅延を経て、大正13(1924)年4月に設けられた仮停車場では、既に「武蔵小金井」の名称が用いられていたようです<sup>48</sup>。

大正15(1926)年1月、常設の停車場として開業する際には、大正15(1926)年1月4日の官報に掲載された鉄道省告示第3号で「武蔵小金井」の停車場名が示されています(資料⑩)<sup>49</sup>。

一連の資料で興味深いのは、先の大正12(1923)年6月の北多摩郡からの通達において、「駅名称ハ当省〔鉄道省:引用者〕ニ於テ任意ニ之ヲ選定スルコト」とある点です。国立の駅名決定においても、同様のことが示されていた可能性がありそうです。

国立駅の名称決定に関して、気になる情報に接しました。それは鉄道省側で「国立」の名を決定したという以下の回顧談です。

「当時の鉄道省運輸局では「国分寺と立川との中間の駅というので<sup>レ</sup>国と立とを採ろうという意見が出され、『立国』とするかという意見もあったが、下り方向に国分寺・立川を並べたほうがよいという理由から『国立』とした」という(当時運輸局事務官であった故井上萬寿蔵談話)<sup>50</sup>

この回顧談からすると「国立」の駅名は、鉄道省が駅名を検討・考慮して決定したことになります。

43 「武蔵野の真ん中へ不思議な停車場 国分寺立川両駅間に四月から 誰が乗るやら降りるやら 寄付で出来る新駅」『東京日日新聞』朝刊大正15・1926年2月26日(金)7面 この記事については、当館HP「机上のメモから」で、「国立駅開設工事から開業へ：新聞記事等による資料紹介」として掲載しています。こちらも併せてご覧ください。

44 「次はあ………? ハテ何と呼ぼうか新駅名を」『一橋新聞』第20号(大正14・1925年7月1日)2面

45 「運動次第で按排する停車場の新設 横浜駅の移転は青木次官のお陰」『東京日日新聞』朝刊大正14・1925年1月27日(火)3面

46 前掲註29と同書「311 駅敷地無償譲渡等協定書 大正十二年(一九二三)七月」

47 前掲註29と同書「310 桜小金井駅開設決まる 大正十二年(一九二三)六月」

48 前掲註29と同書「317 小金井仮駅開設祝賀会祝辞 大正十三年(一九二四)四月」に拠ると、小金井村長の星野治亮氏は「中央線武蔵小金井仮駅新設サレ」と祝辞を述べており、別添の記事③・④・⑥・⑧でも仮停車場を「武蔵小金井」「むさし小金井」として報じています。

49 別添の記事⑩は、この告示について報じたものです。

50 原田勝正「第一章 東京の市街地拡大と鉄道網(1) 一関東大震災後における市街地の拡大一」注(85)『東京・関東大震災前後』(日本経済評論社、1997年)



●鐵道省告示第三號  
 大正十五年一月十五日ヨリ中央本線武蔵境  
 國分寺間ニ左ノ停車場ヲ設置シ旅客、手荷  
 物、小荷物及旅客附隨小荷物ノ取扱ヲ開始  
 ス  
 大正十五年一月四日  
 鐵道大臣 仙石 貢  
 停車場名 所在地 哩 程  
 武蔵小金井 東京府北多摩郡小金井 武蔵境武蔵 二哩一分  
 井村大字小金 武蔵小金井 一哩四分  
 國分寺間

●鐵道省告示第五十五號  
 大正十五年四月一日ヨリ中央本線國分寺立  
 川間ニ左ノ停車場ヲ設置シ一般運輸營業ヲ  
 開始ス  
 大正十五年三月二十四日  
 鐵道大臣 仙石 貢  
 停車場名 所在地 哩 程  
 国立 東京府北多摩郡 國分寺國立間 二哩零分  
 谷保村大字谷保 國立立川間 一哩八分

資料⑩ 『官報』第 4006 号 (大正 15・1926 年 1 月 4 日 国立国会図書館ウェブ サイト (https://dl.ndl.go.jp/pid/2956157) から抜粋して作成

武蔵小金井の駅名に関し、その名称を鐵道省が任意に選定するものと通達されていたことを考えれば、鐵道省の関与があるのも当然のことでしょう。

国立駅の駅名決定を考えるにあたっては、駅名が定まった時期がひとつのポイントになってきます。それは駅名としての「国立」と、分譲地名としての「国立」と、いずれが先に人口に膾炙していたのかと関わることになるからです。

「国立」という駅名の正式な提示は、大正 15(1926)年 3 月 24 日の官報にある鐵道省告示第 55 号でしょう (資料⑩)。この告示を報じた新聞記事<sup>51</sup>も確認できます。

それ以前に「国立」を駅名として示したのものとしては、大正 15 (1926) 年 3 月 15 日付の『一橋新聞』第 31 号に掲載の「建設中の国立町」という記事が知られています。箱根土地の社員の言として「全く寄付になる国立駅が昼夜兼業で工事を急ぎ四月一日から汽車がとまる」とあり、「国立駅」の名称が出てきています (後述の雑誌：註 54 では 2 月下旬には「国立駅」の表示がなされていたことを新たに確認しました)。

『一橋新聞』では、前記のとおり、新駅設置許可前の大正 14 (1925) 年 7 月 1 日付の記事でその設置を報じ、学生へ駅名を募集していますが、その後

資料⑪ 『官報』第 4072 号 (大正 15・1926 年 3 月 24 日 国立国会図書館ウェブ サイト (https://dl.ndl.go.jp/pid/2956223/1/3) から抜粋・加工して作成

駅名決定に関する情報は見当たりません。同年 11 月 15 日付の「さて何とする？町の名駅の名」<sup>52</sup>と題した記事で、同紙上初めて「国立」の名が登場していますが、それは「素晴らしいカレツヂタウン」の仮の呼び名として示されたものです。記事タイトルでは「駅の名」を何にするかとも言っていますが、記事の中では「町の名」のみが語られており、駅名については触れられていません。

駅名が定まった時期を検討する上で、大正 15 (1926) 年 2 月 26 日付の新聞記事<sup>53</sup>で、鐵道省内で駅名の選定に苦慮している様子が報じられているのが気になるところです。鐵道省運輸局のある技師の談として、「省内でも同駅が谷保村谷保といふところにあり反対のほやといふ駅がすでにあるので名前に困つてゐる まさか箱根土地停車場と命名も出来ないのね」と述べているのです。これに拠ると、2 月下旬の段階でも鐵道省内では駅名がまだ定まっていなかった可能性があります。この新聞記事と同じ日に印刷納本された雑誌には、「中央線国分寺駅と立川駅との中間、国立駅 (近く開設両駅の頭字をとつて駅名とす)」<sup>54</sup>との記述が確認できますので、先の新聞記事にある技師の談話をそのまま鵜呑みにはできないところもありますが、国立駅の駅名が決

51 「中央線へ国立駅を開設」『東京日日新聞』府下版 大正 15・1926 年 3 月 25 日 (木) 8 面  
 52 「さて何とする？町の名駅の名 仮の名は国立村 その謂れは「国分寺と立川との間だから」 谷保村は語呂がまづいから此際改める」『一橋新聞』第 27 号 (大正 14・1925 年 11 月 15 日) 2 面。  
 53 「寄付のために苦しむ町村 鐵道省は孤兒院かと 省内技師も大憤慨」『東京日日新聞』朝刊 大正 15・1926 年 2 月 26 日 (金) 7 面 なお、駅名決定の時期については、前掲註 43 にある資料紹介の中でも触れています。  
 54 『実業』第 8 卷第 3 号 (実業社、1926 年) 78 頁「武蔵野の勝地を占めて近代的大都市の出現」

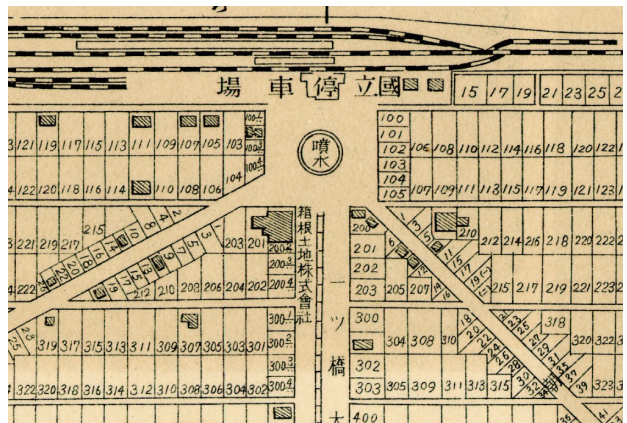
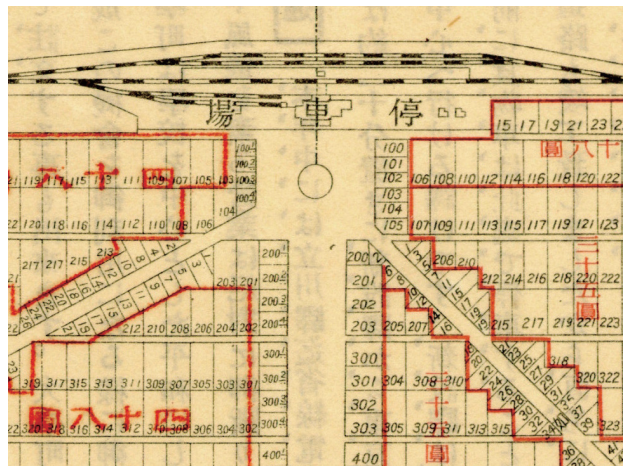
まったのは、駅開設が近づいてきた時期（早くとも大正 15・1926 年以降）であろうと考えています。

先に、駅名決定に関しては鉄道省を名づけ親とする回顧録を紹介しましたが、「国立」という名称に関しては、大学町を開発した箱根土地側を名づけ親とするもの、大学町へ移転してくる東京商科大学側を名づけ親とするものの両意見が従来から存在しており、その決着は未だについていません。『国立市史』でも、「会社と大学のどちらが先かを説明する資料や村会の記録が見つからないので、あとはヤブの中だが」<sup>55</sup>とされています。

私個人としては、会社側と大学側の相互協力で名称が決定されたのではないかという、何とも玉虫色な見方をしています。それは、東京商科大学の『一橋新聞』で昭和 5（1930）年に掲載された回顧録<sup>56</sup>で、教授陣による多数の命名案に苦慮した大学側が箱根土地に選定を一任したと述べている点と、同校の佐野善作学長が、箱根土地の実質的な経営者である堤康次郎氏に宛てた大正 13（1924）年 9 月 25 日付の封書<sup>57</sup>において、「谷保御経営地名称」を「至急御相談申上度候」と伝えている点を考慮しての見方です。“名づけ親を探せ！”というミッションには不合格なものです。が、今までの調査を踏まえた現段階の率直な意見です。

箱根土地による大学町の案内では、「国立」という名称は同社の分譲地名として登場しています。

大学町分譲にあたって箱根土地が作成した最初期の案内が前掲の資料④です。これは大正 14（1925）年の 10 月前後に作成されたと目されるもので、掲載した図に「国立の大学町鳥瞰図」とタイトルを付しています。「省線国分寺と立川駅の間なる大学町の施設概要」として早稲田大学大学史資料センターが所蔵しており、早稲田大学文化資源データベースで PDF が公開されています。



上：資料⑫ 『国立大学町分譲地区画図』の停車場部分  
下：資料⑬ 『国立分譲地区画図』の国立停車場部分

翌大正 15（1926）年の 1・2 月頃に作成されたであろう案内には、片面に「国立大学町分譲地区画図」と題した図を、片面に「国立大学町の施設概要」と題した説明文を掲載しています。区画図には「停車場」とのみ表示され（資料⑫）、説明文中では「新設駅は本年三月迄には出来ませ」と「新設駅」などと述べるだけで駅名は出てきません。因みに、国立駅開業後の「大正十五年九月一日現在」と記された箱根土地の分譲案内になると、片面の「国立分譲地区画図」には「国立停車場」と「国立」を付けた表記となり（資料⑬）、もう片面の「国立分譲地案内」では国立駅を写真入りで取り上げています。

分譲地の販売において、箱根土地は新聞広告を巧みに利用した企業として知られています<sup>58</sup>。国立大学町分譲に際しては、大正 15（1926）年になって

55 『国立市史』下巻（国立市、1990 年）96 頁

56 「『国立』命名物語 谷保村から大学町へ育て上げた教授連」『一橋新聞』第 119 号（昭和 5・1930 年 9 月 8 日）2 面。ここでは、教授陣の持ち寄った地名が 25 にも及び、「理屈が商売の先生方のことにて到底まとまらない 止むを得ないので箱根土地に選定を一任した結果『国立』に落ち着いたのが翌十月だった」と述べています。

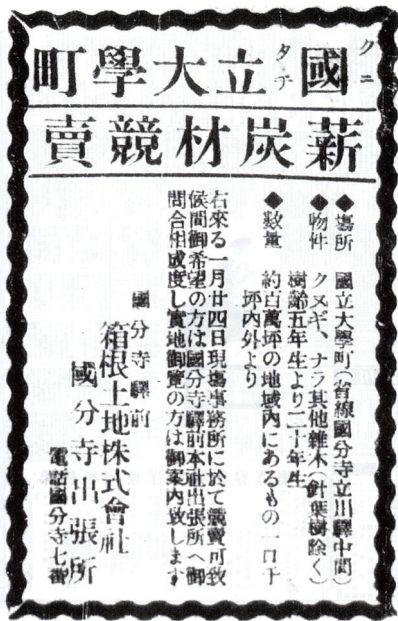
57 田崎宣義氏が『国立の小学校』（校倉書房、2007 年）141～142 頁で、この封書を取り上げています。なお、この封書は「堤康次郎関係文書」として早稲田大学大学史資料センターが所蔵しており、早稲田大学文化資源データベースで PDF が公開されています。

堤康次郎関係文書：〔封書〕（商大移転先其他につき相談申上度）

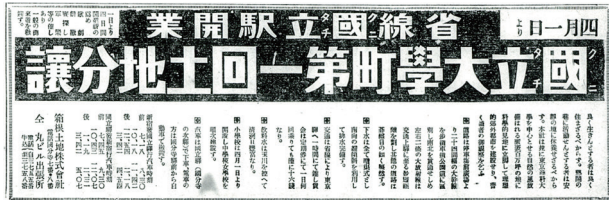
[https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg={%22subDB\\_id%22:%2218%22,%22id%22:%2226469;8%22}&lang=jp](https://archive.waseda.jp/archive/detail.html?arg={%22subDB_id%22:%2218%22,%22id%22:%2226469;8%22}&lang=jp)

58 野田正徳・中島明子編『目白文化村』（日本経済評論社、1991 年）84・85 頁では、大正 11・1922 年から箱根土地が分譲を開始した目白文化村の新聞広告に関して、「箱根土地は分譲地の売込み、イメージ・アップのために、新聞への広告を最大限に利用した」と指摘しています。





資料⑭ 『東京朝日新聞』朝刊 大正15(1926)年1月9日 4面掲載 (国立国会図書館所蔵)



資料⑮ 『読売新聞』朝刊 大正15(1926)年3月31日 3面掲載 (国立国会図書館所蔵)

から本格的な分譲地の広告を展開しています。

現段階で確認できている範囲内ですが、同年1月になると「国立大学町」の分譲地名を表記した新聞広告を出しています(資料⑭)。その後も「国立大学町」の名を宣伝するように大きくメインに据えた広告が出されますが、広告文中に「国立駅」の表記はできません<sup>59</sup>。駅名を記した広告は、3月末から4月初めに新聞各紙に掲載された「国立大学町第一回土地分譲」を告げたものに、「省線国立駅開業」とあるのが初出となります(資料⑮)<sup>60</sup>。

箱根土地の広報活動では、駅名が鉄道省から告示されるまでは、それを公にするような表記を差し控えていたのかもしれませんが、しかし、分譲地の案内や新聞広告という箱根土地の広報活動を通じて、「国立」の名称は、駅名としてよりも先に、分譲地の名として世間に発信されていたのです。

国立駅を紹介するに際して、駅名から地名が名づけられたとする言説をよく見かけます。国立大学町

は「谷保村」の一部に開発された分譲地でしたが、その「谷保村」は、昭和26(1951)年の町制施行にあたって「国立町」となりました。その後、昭和42(1967)年の市制施行時に「国立市」となって現在に至っており、駅名が地名になったというのは一面では全く正しい見解です。

しかしながら、今まで検討してきたように、駅名が定まるより前に、分譲地の名前としての「国立」が先行して存在していました。分譲地の名として宣伝されていた「国立」のネーミングが、駅名選定に影響を与えた可能性は十分に考えられます。

先に紹介した『一橋新聞』の記事のタイトルには、「さて何とする? 町の名駅の名」<sup>61</sup>とあって、新たに開発される大学町の名と、新設される駅名とが一連のものとして捉えられていたことがうかがえます。同紙の回顧談でも、大学町の名称が「国立」と決定したことに続けて、「間もなく駅が新設される、勿論名は「国立」になる、土地の名は、谷保村字谷保でも箱根土地は国立大学町として外部に宣伝して今では知る人ぞ知る国立となつた」<sup>62</sup>と述べており、分譲地の名称と駅名が一連で決まるのが当然という意識が看取されます。こういった当時の意識によれば、「国立」を冠した大学町(分譲地)があるならば、そこに新設される駅は「勿論名は「国立」になる」という流れであったのかもしれませんが。

分譲地名が先だろうが、駅名が先だろうが、そんな細かいことはどうでもいいじゃないか! というご叱責が聞こえてきそうです。しかしながら、昭和26(1951)年の町制施行にあたって町名を決めるまでには、村を分かつような住民運動が展開されたことを忘れてはいけないと考えています。町名決定までのことをここで論ぜられるだけの力量はありませんが、「駅名から町の名が決まりました」と単純に片づけてしまうことが、この街に刻まれた歴史や人々の営為を忘却させてしまうことにはならないかと危惧しています。そんな個人的な想いもあって、「国立」の名称について長々と検討してみました。

### 3-c. 駅舎建築

武蔵小金井駅設置に関する情報から、国立駅開設

59 『読売新聞』朝刊 大正15・1926年3月13日(土)7面掲載の「国立大学町」広告でも、「新設駅三月末開業と同時に土地売出発表す」としており、3月中旬の広告においても駅名は表記していません。

60 同じ広告は4月1日から3日にかけて新聞各紙の朝夕刊に掲載されており、読売新聞の他、時事新報・東京日日新聞・国民新聞・東京朝日新聞・報知新聞への掲載を確認できています。

61 前掲註52と同じ。

62 前掲註56と同じ。



に関して参考となりそうなものを更に確認してみましょう。

武蔵小金井駅の開設にあたって、停車場敷地約2,500坪を請願者から「無償譲渡」するよう、大正12(1923)年6月の通達で示されています<sup>63</sup>。同年11月の嘆願書にある追伸では、「停車場敷地式千五百坪ハ御指定地附近ノ土地所有者ニ交渉請願者ニ於テ負担仕、代地又ハ代金ヲ償ヒ土地所有者ヨリ直接御省〔鉄道省：引用者〕へ無償譲渡ノ手續可仕様協定罷在候」と述べています。この段階で停車場敷地を無償で鉄道省へ譲渡する準備が整っていることが分かります。停車場用地は請願者側(小金井村)が準備していますが、では、停車場の建物の建築費用はどこが負担したのでしょうか？

土地の無償譲渡を示した先の通達では、駅舎建築費も請願者側で負担しろとまでは言っていません。「駅敷地は地主の寄付、駅舎の建設費は「小金井停車場新設期成会」の募金活動によった」<sup>64</sup>とされていますが、同会の決算報告では停車場敷地の買収代金として3万円の支出を記載しているものの、駅舎建築費用に関する記載は見当たりません<sup>65</sup>。

この点に関しては、国立駅開設についての新聞報道が参考になります。先にも紹介した記事ですが、国立駅設置が異例のスピードで決定されたことについて、その理由を「これは全く敷地、建物ホーム、線路、土盛、広場等の工事材料一切価格十五万円を箱根土地会社から鉄道省に寄付した為である」<sup>66</sup>としています。この記述からすると、土地だけでなく建築費用一切までを請願者側で負担するのは特殊な事例であったように受け取れます。

また、大正14(1925)年の武蔵小金井の仮停車場設置の際、鉄道省側の資金投下について新聞で報じられていたのは前記のとおりです。これらを考え併せると、大正15(1926)年の武蔵小金井駅開設に際しての駅舎建築費は、地元がすべてを負担すべきものではなく、駅を設置する鉄道省側の負担があった可能性が考えられるところです。

開業する武蔵小金井駅の駅舎については、別添の記事⑮がその建築の詳細を報じています。その中で「総経費約五万円」の金額が示されています。この中に土地代金が含まれるかどうかは判然としませんが、記事の内容からみると、建築等工事費用の総額を示しているように読み取れます。停車場敷地の買収代金が3万円であったことを考えると、かなりの費用をかけて駅舎等の建築工事がなされたことを述べています。

国立駅については、前記のとおり、駅用地や駅舎、ホーム・線路、駅前広場等の「工事材料一切」、15万円相当の寄付が箱根土地から鉄道省へとなされたことが報じられていました<sup>67</sup>。

さらに、国立大学町の開発に関わり、箱根土地の常務取締役などを歴任した中島<sup>のぼる</sup>陟氏によって遺された資料には、「停車場建設費」について、土地代金を含まず「金参拾万円也」(「貳拾壹万円」と鉛筆書きで改訂)と示したものが存在しています<sup>68</sup>。箱根土地の社員であった方の回顧録でも、「駅が30万円だった」<sup>69</sup>と述べているものが確認できます。国立駅建設工事では、線路を高い位置に設けるために土盛を施すなどの工事を行っており、単に駅舎を建築するためだけの工事費用としてこの金額をみることはできませんが、それにしてもかなり高額な費用をかけた工事であった可能性があります。

武蔵小金井駅開設に関する資料では、小金井停車場新設期成同盟会による決算報告が遺存しており、停車場敷地買収代金や祝賀式費用などの情報を確認できます。対して国立駅に関しては、これに相当するような資料は現時点では見つかっていません。紹介した中島陟氏の資料が書籍として刊行されており(渡辺彰子『国立に誕生した大学町一箱根土地(株)中島陟資料集一』)、とても重要な情報源となっていますが、当時の谷保村が駅開設とどう関わったのかを示す資料はかなり限定的です。武蔵小金井駅や他の駅に関する資料を参照しながら比較・検討していかなければならないのが現状です。

63 前掲註46と同じ。

64 『小金井市の歴史散歩』(小金井市教育委員会、2005年)20頁「46 武蔵小金井駅」

65 前掲註29と同書の「321 停車場新設期成会解散通知 大正十五(一九二六)一月」

66 前掲註43と同じ。

67 『私たちの町くにたち 聞きとり資料』(1)国立開発～昭和20年(国立市公民館図書室所蔵)に、「三田章作氏の話」として「大正15年 箱根土地KKが15万円を寄附して、国立駅ができる」との記述があります。

68 渡辺彰子『国立に誕生した大学町一箱根土地(株)中島陟資料集一』(株式会社サトウ、2015年)107～111頁掲載の「箱根土地株式会社計画部」による「谷保村大学都市建設計画書」。なお、「国立大学都市建設費予算書」とタイトルを訂正するなど、随所に鉛筆書きによる改訂が加えられています。

69 『私たちの町くにたち 聞きとり資料』(1)国立開発～昭和20年(国立市公民館図書室所蔵)「芦沢栄さん(もと箱根土地社員)の話」

### 3-d. 祝賀会

先の小金井停車場新設期成同盟会による決算報告に興味深い記載がなされています。それは「武蔵小金井駅新設祝賀式収支決算」の余興費の附記にある「太神楽百五十円、煙火七十円、ハヤシ四十円」の記載です<sup>70</sup>。

大正 15 (1926) 年 1 月 15 日、武蔵小金井駅の開業式と祝賀会が催されており、別添の記事⑰ではその様子を、「十五日正午から同駅前広場に開かれた紅白のだんだら幕に囲まれた広場には居囃しやら茶番狂言太神楽の余興が笛太鼓に景気をつけ今日を晴れと気飾つた村の人達がゑいとうゑいとう繰出す大賑ひ」と報じています。また、式後の祝賀会でも「来賓五百余名は太神楽や花自動車のはやしや爆竹やらの陽気なふん囲気につつまれ」たと記しています。

また、祝賀会の回顧録には以下のようなものが見受けられます。

「駅頭には国旗と海軍旗がはためき朝日を受けて美しかった。村人達が電車の発着を見物しようと朝から駅頭はにぎわい、お祝の花火は限りなく青空に舞いひびき、正月気分と合わせて喜びに満ちた。子供も大人も花火から舞い落ちる紙の人形やテマリユウ（落下傘）を拾おうと遠くまで追いかけたものである」<sup>71</sup>

新聞記事や回顧録には、祝賀会の余興として太神楽、花火・爆竹、はやしの記述がみられます。これらに要した費用が上記の金額であったことが、収支決算の記載から知ることができます。因みに、収支決算によると、余興費の予算額は 170 円であったところ、決算額は 360 円となっており、予算額よりも 190 円も増額しています。新聞記事や回顧録からは、祝賀会の賑やかな様子がうかがえますが、予定よりも費用を増額してまで賑やかしを加えたことが、「陽気なふん囲気」を醸成するのに功を奏したのかもしれませんが。資料に記載されたちょっとした記録であっても、当時の状況を垣間見ることのできる貴重な情報源となってくれます。

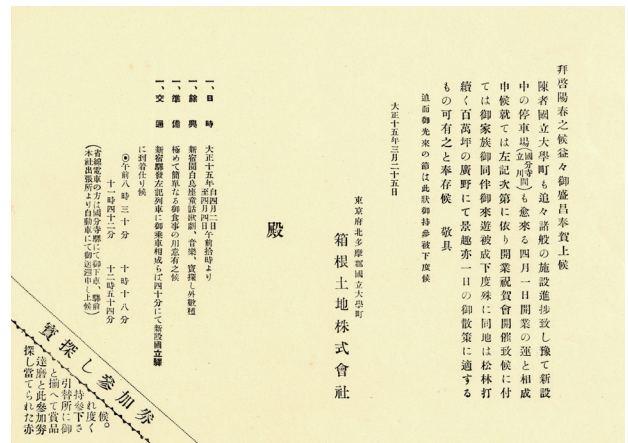
国立駅の開業に際しては、開業日の大正 15(1926)年 4 月 1 日から 4 日までの間、箱根土地による祝賀会が開催されました。前掲の資料⑮には、「一日より四日間開業祝の為め歌劇 餅撒 宝探し 軍楽等の

催しあり 一般の御来遊を歓迎す」と告知しています。同年 4 月 2 日に国立駅開業を伝えた新聞記事<sup>72</sup>では、「余興場には餅まき、新宿園白鳥座童話劇、軍楽隊、宝探し等数種の催し物」と祝賀会の様子を伝えています。

祝賀会の案内(資料⑯)には「宝探し参加券」が付いています。記事に出ている「宝探し」とは、会場内で赤達磨を探して、参加券とともに引替所に持参すると賞品がもらえるといったものだったようです。また、箱根土地が新宿で経営していた遊園地「新宿園」にあった白鳥座の少女歌劇団等による「歌劇」も開催されています。これは大学通り沿いに箱根土地が設けていた余興場で行われました(資料⑰: 4 月 1 日の祝賀会の様子を撮影した写真)。

祝賀会の回顧録には、以下のようなものが見受けられます。

「国立駅が出来た時、主人は小学校だったけど、お祝いによばれていって、高い櫓が駅前の交番があるところいらに立っていて、餅投げをして、餅とゴムマリかなんだかをもらってきたのを覚えているね」<sup>73</sup>



資料⑯ 国立駅開業祝賀会案内 大正 15 (1926) 年



資料⑰ 国立演劇場(余興場) 大正 15 (1926) 年  
(国立市所蔵: 本田家旧蔵資料)

70 前掲註 65 と同じ。

71 星野進一『小金井百一話』(小金井新聞社、1980 年)「五七 武蔵小金井駅の開通経過と記録」182 頁

72 「きのふ国立駅開業」『東京日日新聞』府下版 大正 15・1926 年 4 月 2 日(金) 6 面

73 『国立の生活誌VI 古老の語る谷保の暮らし(三)』(国立市教育委員会、1988 年)佐藤リキ子さん「国立開発」98 頁





資料⑱ 国立駅開業祝賀会の開催日 大正 15 (1926) 年  
(明窓浄机館所蔵)

ここに出てくる「高い櫓」は、資料⑱の中央に写っているものと考えられます。新聞記事では余興場で餅まきをしたことが述べられていますが、回顧録からは駅前の櫓でも行われたことが知られます。

箱根土地が4日間に亘って開催した国立駅開業祝賀会ほどの程度の費用を懸けたのか気になる所ですが、残念ながらそれを知り得る資料にまだ出会っていません。同社が開発した新たな分譲地「国立大学町」の宣伝も兼ねての祝賀会だったでしょうから、それなりの費用が投じられたと考えられますが詳細は不明です。

### 3-e. 磯村貞吉氏

武蔵小金井駅の開設に関する新聞報道や資料には、停車場新設用地に関する寄付者の名前が幾つか確認できます。別添の記事②では、大正 13 (1924) 年 4 月 11 日に新設された仮停車場について、候補地の地主である磯村貞吉氏が、「敷地の三千坪と設定工費凡そ七千円を鉄道当局に寄付しその実現に努力した結果いよいよ落成し」<sup>74</sup> たものだと報じています。この寄付は、「震災〔関東大震災：引用者〕後の市民の気分を作興させる為めまた名所小金井を世に紹介する公共心から」なされたものであるとしています。

同趣の記述が、大正 13 (1924) 年の名鑑<sup>75</sup> にも見受けられます。ちょっと長いですが、以下のよう  
に紹介されています。

「客年九月帝都三百万の市民が大震火災に脅威せられ意気消沈して居るのを深く慨嘆し、之を挽回せしめて元気を作興せしむるには先つ三春の行楽を擅〔ほしいまま：引用者〕にせしむる必要がある、それには天下の絶勝で帝都に近い小金井の観桜を大に宣伝して復興の元気を促進するの妙策たるを感じ、本年一月以来日夜寝食を忘れて鉄道当局と折衝を重ね市民の観桜に便ならしむ為め臨時駐車場の設置を請願したが、当局者も同氏の熟誠を諒として遂に武蔵小金井駅を新設せんとするや率先その敷地三千坪及建設費の全部を寄附して四月十一日から開通した」

仮停車場開設祝賀会の式辞・祝辞でも、「夙〔つと：引用者〕に磯村氏ハ多大ノ私財ヲ投ゲ打チ卒先シテ此事ニ当リ」・「磯村貞吉氏ノ深大ナル厚意」<sup>76</sup> と同氏の功績を取り上げていることからみて、磯村氏の寄付行為が仮停車場開設に多大な影響を与えたのは間違いなさそうです。

大正 11 (1922) 年 1 月に小金井村よりなされた常設停車場設置の請願では、479 名の同村の戸主が請願書に署名していますが、その中に磯村氏の名前は確認できません<sup>77</sup>。同年 8 月の「小金井村ニニヶ所ノ停車場ヲ設置」の追願の際や、翌年 11 月の停車場敷地指定の嘆願では連名に加わっています<sup>78</sup>。

武蔵小金井駅が常設駅となる直前の大正 14 (1925) 年 12 月 1 日には、所有地の 9 反 6 畝 1 歩を新駅設置の敷地交換用地として寄付したことに對して、小金井村の星野治亮村長から謝状が贈られています<sup>79</sup>。また、大正 15 年の武蔵小金井駅開業を報じた新聞記事（別添の記事⑦）では、磯村氏が地主代表として祝辞を朗読したことを伝えています<sup>80</sup>。

また、停車場新設費用の収支決算報告<sup>81</sup> では、その収入 21,350 円について、「磯村貞吉外四名寄附土地壹町六反六畝壹歩売却代金」と記し、寄付者の代表として磯村氏の名を挙げています。

これらの点から鑑みて、仮停車場開設のみならず、

74 別添の記事①で、「今年〔大正 13・1924 年：引用者〕は同地方から仮駅新設の費用全部を負担するからと小松鉄相に請願があり」とあるのも、磯村氏の工費約 7,000 円の寄付を述べているのかもしれませんが明確ではありません。

75 『大日本著名鑑』撰政宮殿下御成婚式記念（報知新聞社出版部、1924 年）「磯村貞吉氏」

76 前掲註 29 と同書の「317 小金井仮駅開設祝賀会祝辞 大正十三年（一九二四）四月」

77 前掲註 29 と同書の「305 小金井停車場設置請願書 大正十一年（一九二二）一月」

78 前掲註 29 と同書の「307 小金井停車場新設の件追願 大正十一年（一九二二）八月」、「312 停車場敷地指定嘆願 大正十二年（一九二三）十一月」

79 前掲註 29 と同書の「316 土地寄附者への謝辞並びに寄附申込書 大正十四年（一九二五）十二月」

80 前掲註 29 と同書の「320 武蔵小金井駅開設祝賀会祝辞・式辞 大正十五年（一九二六）一月」では、その時朗読された祝辞（祝詞）の内容を確認できます。

81 前掲註 65 と同じ。

その後の常設駅としての開業においても、磯村氏が大きく貢献をしたであろうことが窺知されます。

名鑑等<sup>82</sup>の記載に拠れば、磯村貞吉氏は新潟県の出身で、幕末期の万延元（1860）年6月13日の生まれです。15歳で上京し、英学を修めた後に学農社<sup>83</sup>で4年間学び、明治19（1886）年には小笠原島全島を探検して、『小笠原要覧』を著しています。翌年には茨城県下の官有地払下げを受けてその開拓に従事しますが、明治30（1897）年には三田育種場<sup>84</sup>の経営に当り、経営悪化の極みに達していた同場の再建に尽力して成功を収めています。

磯村氏は三田育種場の経営に携わっていたことから、その住まいは同場所在地の「芝区三田四国町」（現在の港区芝）にありました<sup>85</sup>。同氏と小金井村との関係性は、同氏が小金井村に広大な土地を所有していたことに拠っています。

『小金井市誌VI』今昔ばなし編では、磯村氏について、「小金井の一等地、小金井橋の南一帯から始まって所かまわず買いきり、星野治亮さんの記憶によると、百ヘクタールくらいはあったのではないかといわれる」<sup>86</sup>と述べています。

また、『小金井市誌V』地名編では、「第1次世界大戦後は、村内旧家の没落に乗じて土地ブローカーの進出が顕著となり“小長久保”の一部が買収された」として、その注記の中で「芝浜埋立地で巨利を得、その金と銀行からの融資を受けてこの地方に約24万坪（79万㎡）を買い占めた」<sup>87</sup>と磯村氏について述べています。

小金井村での磯村氏の土地所有に関しては、先の大正13（1924）年発行の名鑑<sup>88</sup>の記述が参考になりますので、以下に紹介します。「氏〔磯村貞吉氏：引用者〕は神奈川県川崎町を去る

東南約十五六町の田島町字大島の海面に築堤を繞らし東京湾に向つて約二十万坪の埋立を竣成して一大試験場を開拓したが後之を浅野総一郎に譲渡し、更に帝都の郊外桜花の名所たる府下小金井村に於いて約四十万坪の良地を購入し茲に一大種芸場を設けてあらゆる農芸植物の育成を試み将来の大成を期して居る」

昭和2（1927）年の人事録<sup>89</sup>にも、以下のような類似した記述が確認できます。

「日露戦役後東京湾川崎海岸の一部を埋立て農事試験場を建設し傍ら農具製作所に宛てゝ其製作品を農界に供給しつつある（中略）現事小金井に約廿万坪の種芸場を有し和洋の菜菓を種植す」

『小金井市誌V』地名編で述べている「芝浜埋立」とは、名鑑に言う「田島町字大島の海面に築堤を繞らし東京湾に向つて約二十万坪の埋立を竣成」したことを指していると考えられます。また、大正元（1912）年の人名辞典<sup>90</sup>では、「神奈川県下の大農園を開く」と述べていますが、これも埋立地における試験場のことを述べているとみられます。

極めて少ない資料しか確認しておらず、詳細を述べるには全くの調査不足ですが、名鑑等の記述に依拠して推察すると、「日露戦役後」の埋立とあることからみて、埋立地に試験場を開設したのは明治後期ぐらいだったのではないのでしょうか。また、その売却については、「浅野総一郎」への売却を名鑑が述べているのみで、売却時期を直接示したものは見当たりません。大正元（1912）年の人名辞典では、神奈川県下を開いた大農園について、その売却に触れていないことを考慮すれば、人名辞典発行時（大正元・1912年）から名鑑発行時（大正13・1924年）までの間に、埋立地を売却していた可能性が考えられます。

82 前掲註75のほか、『明治人名辞典』上巻（日本図書センター、1990年：底本1912年）、『大正人名辞典Ⅱ』上巻（日本図書センター、1992年：底本1927年）を参照しました。各人名辞典等で相違する部分は、前掲註75の名鑑を主として用いています。

83 名鑑等では「農学社」としていますが、『越佐名士録』（越佐名士録刊行会、1942年）では、磯村氏の子息（昭和4・1929年に貞吉を襲名）の紹介で、父の貞吉氏を「彼の有名なる津田仙氏の学農社に学んだ」（551頁）と述べており、こちらの説を採用しました。

84 三田育種場は、明治10・1877年から「三田四国町」（現在の港区芝）で営まれた官営の種苗会社で、内外優良種苗の導入・試作・増殖・配布を主に行いました。前掲註75の名鑑では「慶應義塾と共に三田の二大名物として知られて居た」とも述べていますが、明治19・1886年になると民間に払い下げられます。（『国史大辞典』第13巻（吉川弘文館、1992年）343・344頁「三田育種場」（牛山敬二）を参照）

85 前掲註29と同書の「319 武蔵小金井駅開設祝賀式次第・出席者 大正十五年（一九二六）一月」でも、その住所は「東京市芝区三田四国町一ノ一八」とされています。

86 『小金井市誌VI』今昔ばなし編（小金井市、1980年）37頁「磯村貞吉」

87 『小金井市誌V』地名編（小金井市、1978年）120頁、123頁

88 前掲註75と同じ。

89 前記註82掲載の『大正人名辞典Ⅱ』上巻（日本図書センター、1992年：底本1927年）104頁「磯村貞吉」

90 前記註82掲載の『明治人名辞典』上巻（日本図書センター、1990年：底本1912年）イ61頁「磯村貞吉君」



磯村氏が小金井村で所有していた土地については、各記述でその面積が相違しており判然としませんが、広大な土地を所持していたことは間違いのないでしょう。また、その地所内には別荘もあったようです。

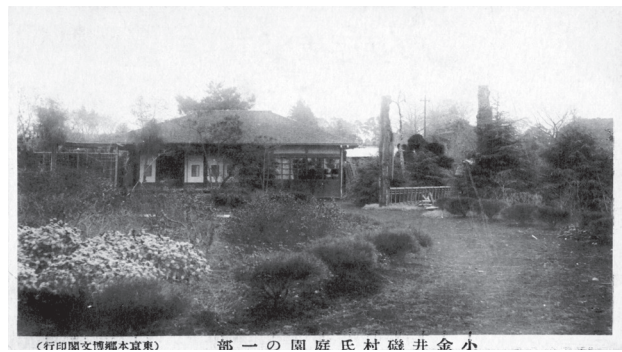
『続々小金井風土記』では「磯村さんの別荘」として、「松の大木が生える七千坪くらいの敷地に、三十坪ほどの立派な家が建っていた」と紹介しており、「大正末期に土地師の磯村貞吉が購入したものだ」としています<sup>91</sup>。

さらに、磯村氏の別荘に関しては、『地図と写真で読み解く 昭和の小金井』の記述が参考になります。そこでは磯村氏が造成した一種のフラワーガーデンであった「華丘香園<sup>はなおかこうえん</sup>」について触れ、「華丘香園は別名三田育種場小金井支場とも呼ばれ、磯村の別荘も兼ねており、花見時の四月には銀座カフェーパウリスタが出店していました」<sup>92</sup>と述べています。また、大正7（1918）年頃に頒布されていた由緒書に華丘香園が紹介されている点が指摘されており、これ以前には小金井橋近くの地に磯村氏が別荘を構えていたことがわかります（資料⑨）。

小金井村に広大な土地を所有していた磯村氏は、前記の如く、武蔵小金井駅開設にあたって所有地や資金の寄付を行っています。駅の開設が観桜客に便益を与えたのは勿論ながら、小金井村をはじめ周辺地域の開発に資するところも大であったでしょう。この点について、名鑑には次のような興味深い記載がなされています。

「近き将来に於いて帝都の延長否な刻下現代社会の必要に迫られて居る理想的田園都市を右所有の土地〔小金井村の約40万坪の土地：引用者〕を中心として作る計画を以て夙夜その施設経営を進めて居るから日ならずして社会の耳目を聳動するに至るであらう」<sup>93</sup>

これに加えて、「三田育種場経営の小金井試作場の香園と理想的住宅地の鳥瞰図」と題された図も一



資料⑨ 華丘香園の絵葉書（小金井市教育委員会所蔵）

緒に掲載してあります。

鳥瞰図の図版が小さいためその詳細が判読できませんが、先の記述内容と併せて考えると、磯村氏は小金井村に理想的な郊外住宅地を建設しようと目論んでいたことがうかがわれます。この計画がどの程度実現したのか掴めていませんが、磯村氏が大正15（1926）年1月の武蔵小金井駅開設に際した祝詞で、「現代ノ理想ニ適合スル道路衛生産業等諸般ノ設備ニ全力ヲ傾倒シ、着々斬新ナル計画ノ下ニ文化的新天地ヲ開発セン」と「聊カ所思ヲ述ベ」<sup>94</sup>ているのは、同氏による郊外住宅地構想に関係のある発言だったのではないのでしょうか。

大正13（1924）年刊行の名鑑では、磯村氏が小金井村の所有地を中心とした理想的田園都市を作る計画に奔走する様子を報じていました。

一方、国立大学町開発の舞台となった谷保村でも同じ年に開発の話が持ち上がっています。

大正13（1924）年8月に箱根土地の堤康次郎氏らが谷保村役場を訪れ、村の有力者や有力地主と分譲地開発について懇談したと言われており、この訪問が端緒となって国立大学町の開発が本格的にスタートしたとされています<sup>95</sup>。

更に、大正13（1924）年6月に編まれた『北多摩郡谷保村郷土誌』<sup>96</sup>には、次のような記述がなされています。

「昨年〔大正12・1923年：引用者〕末ヨリ山林畑ヲ合セテ二百町歩程有志ノ奔走ニヨリ文化住宅地トシテ箱

91 芳須緑『続々小金井風土記』（小金井新聞社、1990年）178頁「⑩磯村さんの別荘」 なお、同著の『続小金井風土記』（小金井新聞社、1986年）108頁「③磯村の坂」では、磯村氏別荘東側の坂が「磯村の坂」と呼ばれていたことを紹介しています。

92 多田哲編『地図と写真で読み解く 昭和の小金井』（小金井市観光まちおこし協会、2018年）10頁「小金井の行楽地化推進」

93 前掲註75と同じ。

94 前掲註80と同じ。なお、磯村氏の祝詞では、続けて「若シ之ニ反シ因循姑息小成ニ安ンジ、依然トシテ根本的施設ヲ忘却シ、旧時ノ面目ヲ改ムルコトナカラシム」とも述べています。全く個人的な感想ですが、祝いの席で恨み節のような詞を磯村氏が続けたのは、同氏の計画した郊外住宅地構想に障害となるような事態が生じていたのかとも憶測しています。

95 原田重久「大正時代の谷保村と国立学園都市の開発－回想風－」『多摩のあゆみ』第41号（多摩中央信用金庫、1985年）24・25頁

96 国立市立国立第一小学校が所蔵する谷保村の郷土誌。同校の開校150周年を記念して公開することとなり、当館で令和5・2023年10月に冊子として刊行しました。現在、無料配布中です（在庫がなくなり次第終了）。

根土地株式会社トノ間ニ売買契約成立シ大正十三年六月ヨリ其ノ実行ニ着手ス」

この「文化住宅地」とは、郷土誌内にある概略図(資料⑳)の記載から、中央線南側の谷保村地内、後に国立大学町として開発される場所のことを示していることも分かります。

大正 12 (1923) 年 9 月 1 日の関東大震災により東京商科大学は甚大な被害を受け、それが契機となって同校は郊外移転へと本格的に動き出すこととなります。先の郷土誌の記述では、震災が発生した年の年末には箱根土地と谷保村との間で、「文化住宅地」となすための土地の売買契約が成立していたこととなります。そして翌年 6 月にはそれに着手することになっているともしているのです。

箱根土地の営業報告書の記載からみて、同校が国立大学町の建設に着手したのは大正 14 (1925) 年以降であったと考えられます<sup>97</sup>。郷土誌が述べているように大正 13 (1924) 年 6 月から着手された可能性は低いと考えていますが、同年 7 月の新聞報道には「新停車場計画 立川附近に」と題した次のような記事<sup>98</sup>が確認されます。

「北多摩郡地内の中央線国分寺及び立川両駅間の距離は三哩八分で大都市近接の地方に於る停車場としては長距離の方である 鉄道省東京鉄道局に於ては近く両駅間立川駅寄りに自動信号所を設置する計画の由である」

この鉄道省東京鉄道局による「自動信号所」設置の計画と、箱根土地による谷保村での「文化住宅地」開発とに関係性があることを示す資料はまだありません。いずれも実際の動きが生ずるのは翌年になってからのことですので、駅の開設を示す情報と街の開発を示す情報が、単なる偶然で同時期に発出されただけなのかもしれません。しかし、後に本格的に始動する事象を先取りしたかのような情報が存在するのは気になります。まだ何かしらを述べられるだけのものがないのは心苦しいのですが、今後注意して調査を進めるべきポイントと考えています。

武蔵小金井駅は大正 13 (1924) 年 4 月に仮停車場が開設しました。そして同年には磯村氏による小金井村での理想的田園都市開発計画について報じられています。一方、谷保村では箱根土地による「文

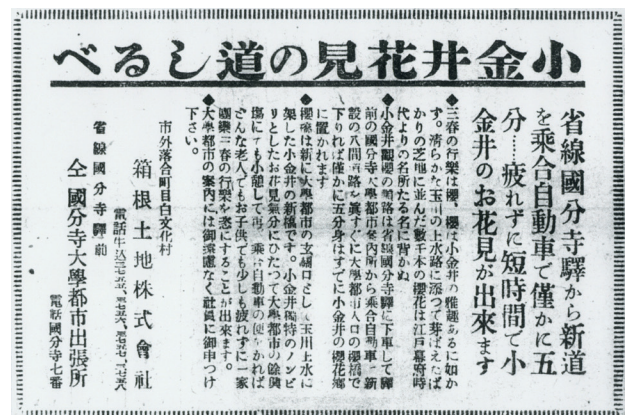


資料⑳ 『北多摩郡谷保村郷土誌』にある谷保村の概略図  
大正 13 (1924) 年 (国立市立国立第一小学校所蔵)

化住宅地」の建設計画が同年に着手すると郷土誌に記録され、国分寺・立川間への新停車場設置計画が新聞で報じられています。関東大震災を経て、その翌年に郊外住宅地開発と停車場開設の動きが、同じ中央線沿線で展開していたという共通性は意識しておく必要があるでしょう。

### おわりに

箱根土地が大正 14 (1925) 年 3 月に分譲地の売出しを発表した国分寺大学都市 (後の小平学園) では、立地的に小金井に近いこともあって、小金井の観桜客向けの広告をその年に打ち出しています (資料㉑)。この 4 月には、2 年目となる武蔵小金井の仮停車場が開設されていましたが、広告では分譲地



資料㉑ 『東京朝日新聞』夕刊 大正 14 (1925) 年 4 月 18 日 2 面掲載 (国立国会図書館所蔵)

97 国立大学町の開発工事に関する記述が箱根土地の営業報告書に認められるのは、大正 14・1925 年下半期 (同年 6 月から 11 月) の第 12 回報告書からです。

98 「新停車場計画 立川附近に」『東京朝日新聞』朝刊 大正 13・1924 年 7 月 23 日 (水) 6 面





資料② 国分寺大学都市分譲地案内の絵葉書  
大正 14 (1925) 年 (個人所蔵)

に近い国分寺駅の利用を勧めています。国分寺駅から箱根土地による乗合自動車を利用すれば「どんな老人でもお子供でも少しも疲れずに一家団欒三春の行楽を恣にすることが出来ます」と謳っています。

また、箱根土地が得意先に郵送した分譲地案内の絵葉書(資料②)には「大学都市附近小金井の桜」と題した写真を掲載し、「爛漫の頃行人皆花下に酔ふも、落花によく葉桜によく、紅葉に更によし。されば花時一日十万の花客を迎へ夏秋また散策の好適地として人口に膾炙せり」といった紹介文を添えて、分譲地近くの優れた行楽地として小金井の桜を取り上げています。

冒頭に紹介した小金井の観桜客を国立大学町の視察へと誘うチラシ(資料①)は、このような先行する分譲地の広報活動の流れを受けて展開されたものだったようです。

箱根土地が小金井の観桜時期に配布したチラシの紹介としてスタートした今回の資料紹介。執筆者の悪い癖で、またもや関連する事項へと当てのないうつろいに出してしまいました。キレもまとまりもなく、ダラダラと駄論・推論を重ねましたこと、何卒ご容赦ください。これらは執筆者の能力不足と調査不足に起因しております。出来ますれば、ご批判やご指摘をいただくと大変助かります。国立駅開設 100 年となる記念イヤーまであと 2 年と迫ってきましたが、調査すれども何ら示せる成果もなく、ただただ焦りがつのるばかりの日々を過ごしております。皆さんからお寄せいただくご批判やご指摘が、貴重な情報となります。何卒宜しくお祈りいたします。

いよいよ令和 6 (2024) 年の桜の季節がやってきました。東京都内にはお花見の名所が幾つもありますが、今年は JR 中央線の武蔵小金井駅から、玉川上水へと向かい、「名勝小金井桜」のヤマザクラで目を楽しませるのはいかがでしょうか？

大正 13 (1924) 年 4 月に武蔵小金井の仮停車場が開設されましたが、同じ年の 12 月、日本有数の多種多様なヤマザクラの一大集植地として小金井の桜は国の名勝に指定されています。その後、都市化の進行等によってサクラが枯死し、景観の変化が叫ばれていますが、サクラ並木の保存と復活に向けた様々な取り組みが行われています<sup>99</sup>。

武蔵小金井駅の開設にご興味のある方は、玉川上水へ向かう途次、山王稲穂神社に御参詣されることをお勧めします。同社境内には昭和 8 (1933) 年に建立された駅開設記念碑があり、駅開設当時の小金井村長であった星野治亮氏が認めた、「武蔵小金井駅開設記念碑」の文字が正面に力強く刻まれています(資料③)。同氏は、大正 15 (1926) 年 1 月の駅開設の際の式辞で、「此間ニ処シ十有余年間、終始一貫東奔西走交渉論議其辛苦実ニ想像ノ外トス」<sup>100</sup>と駅誘致活動における苦勞譚を語っていました。常設の駅として武蔵小金井駅が開設されたことへの村人や地域の人々の大きな喜びが、この石碑の前に立つと胸に迫ってくるように感じられます。



資料③ 武蔵小金井駅開設記念碑 昭和 8 (1933) 年  
令和 5 (2023) 年 11 月撮影 (山王稲穂神社境内)

99 『名勝小金井(サクラ)』(小金井市教育委員会生涯学習課、2021年)  
100 前掲註 80 と同じ。



また小金井桜を愛でながら堤を歩いたら、浴恩館公園にもお立ち寄りください。公園内にある小金井市文化財センター(旧 浴恩館)で開催中の季節展「名勝小金井桜」(5月26日まで)は必見です。同展では、小金井桜の古い写真や絵画等の小金井市所蔵のコレクションが公開されており、甲武鉄道や武蔵小金井駅開設に係わる貴重な資料も展示されています<sup>101</sup>。

小金井桜を楽しんだ後は、さらに足をのぼして国立駅へもお立ち寄りください。国立駅南口の駅前広場から大学通りの車道寄りには桜並木が続いています。実はこの桜並木、「小金井の花見客を国立に吸収しようとする遠大な理想(?)を抱いて」<sup>102</sup> 植樹が計画されたとも言われているものなのです。

「さくら花咲く小金井かえり 文化の華さく国立へ」。「名勝小金井桜」のお帰りには、国立へもぜひお立ち寄りください。

右：小金井橋より下流側（東側）を望む

左：早咲きの小金井の桜（平成 24 N30）

いずれも令和 6（2024）年 3 月 17 日撮影

(2024.03.29：中村記)

101 同文化財センターの多田哲学芸員には、写真資料の借用でお世話になりました。また、季節展の準備でお忙しいところ突然訪問したにもかかわらず、展示資料について詳細にご説明していただきましたこと、重ねてお礼申し上げます。

102 「貸地紹介と桜並木 町会自慢の発展策二つ」『一橋新聞』第 170 号（昭和 8・1933 年 6 月 12 日）3 面 なお、大学通りの桜並木については、当館 HP 掲載の写真紹介で 2019 年に紹介しています。そちらも併せてご覧ください。当館 HP「くにたち あの日、あの頃」写真紹介-14「桜咲く春の大学通り」1962（昭和 37）年頃